

# 図書館だより

第33号 平成16年12月15日  
高松工業高等専門学校図書館  
TEL (087) 869-3813  
FAX (087) 869-3948

## 1000ページ読破記 ☆優秀賞作品☆

### 坂の上の雲

1年1組 齋藤 秀樹

千ページ読書ということで、何を读もうか迷っている。適当に書棚を探していると、「坂の上の雲」という題の本が八冊並んでいる。前書きを見ると、どうも日清戦争から日露戦争にかけての物語らしい。興味をひかれて、本文を読んでみる。「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている。」さすが司馬遼太郎の作品だけあって整っている。

概略は明治期にあたる日本が、大改革を通じ、日清戦争や日露戦争を起こして、はたまた勝ってしまうといった不思議さを語る。といったところである。

司馬遼太郎、彼は、この物語の主人公に二人を選んだ。一人は、秋山好古、もう一人は秋山真之である。もっとも二人というよりは兄弟と書くべきであった。兄の好古は、日露戦争において、ロシアのコサック騎兵を大いに敗るなど、陸軍大将（当時、彼は騎兵科だった）として活躍した人物である。弟の真之は、あの有名な海将、東郷平八郎のもと海軍参謀をつとめていた。T字戦法という海軍作戦上極めて有力な戦術を考案したのも彼である。

そろそろ感想に入ろうと思う。この物語は感動する。実に感動する。というか涙まで出てくる。話は単なる歴史どおりの筋書きでしかないのだが、人物一人一人の言動が非常な感動をあたえるのである。たとえばこうである。「不幸が、この五月十五日をはさんで六日間のあいだに連続した。…二戦艦をうしなつて（日露戦争時のロシアの水雷による）、敗残の艦長たちが旅順港外からもどってきて三笠にそれを報告すべくたずねたとき、かれらはみな東郷の顔を見ることができず、みな声をあげてこの悲運に泣いた。この時も東郷は平然としていた。『みな、ご苦労だった。』と、それだけをいって、卓上の菓子皿を艦長たちの方に押しやり、食べることをすすめた。」

これはかなり有名な話であるが、これだけでも、この東郷の偉大さが伝わってくる。もっとも、ここだけの描写では分かりづらいが、この時代、日本が持っていた戦艦は、わずかに六隻でそのうちの三十三%にあたる二隻が沈んだといえ、事の甚大さが分かる。

はっきりいって感想が書けない。書けばとりとめがない。総数三千ページという本の中に三百を越える人物が登場しているのである。

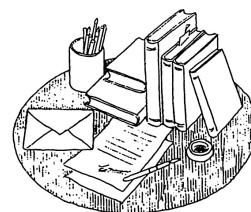
ので、余談を書こうと思う。じつは、この本は、はじめて乃木希典を批判した本としても有名である。当時（というか今も）乃木は武士道の鏡とか最後の名将とか言われてきたが、その戦略は、まさに武士道で、旅順要塞に対し大砲の斉射後、銃剣突撃を繰り返し、六万人という膨大な数の戦死者を産出するに至った。

著者は、この本にあって、その事を（他も）極めて正しいと思われる価値観で著しており、非常に物事の真相が分かり良く、その点歴史書としてもいただけるこの本を、千ページ読破記の記録として書いた事は、間違いでは、なかったと思う。

追伸、この本は2007年度、ドラマ化されるそうです。実に楽しみです。

司馬遼太郎 坂の上の雲 3,061ページ

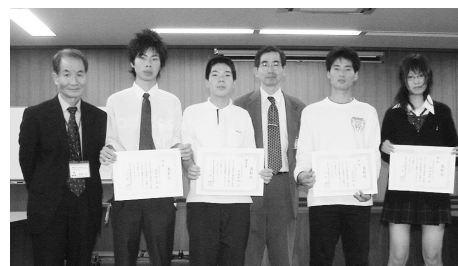
(さいとう ひでき)



## 平成16年度千頁読破記入賞者

- |      |              |      |       |
|------|--------------|------|-------|
| ●優秀賞 | 坂の上の雲        | 1年1組 | 齋藤 秀樹 |
| ●佳作  | 物理科学の本読破記    | 3年S組 | 相賀裕太郎 |
| ●佳作  | 戦後文学・椎名麟三を読む | 2年C組 | 増田 佑衣 |
| ●佳作  | 太平洋戦争の研究     | 4年E組 | 大角 卓也 |

応募数…226編



## 1000ページ読破記 ☆佳作作品☆

## 物理学の本読破記

3年S組 相賀 裕太郎

僕はこの夏「科学の終焉」「電気とはなにか」「電流とはなにか」「場とは何か」という物理学についての本を四冊読んだ。なぜこれらの本を読むに至ったかというと、三年生になってからの授業は専門分野が主となってきて、授業だけでは理解しきれない状況になってきた。そこで、その分野の専門書を読み理解を深めようと思ったからだ。

まず読み出したのは比較的本が薄く、簡単に書かれてある電気と電流、場についての三冊の本だ。僕はどちらかというところ、専門分野の中で電気分野は得意だが、それは公式を用いて現象を式と表しているだけで、数学的な考え方で解いているだけだった。だから電流とは何かという基本的な疑問は解らなかつた。だがこれらの本を読んでもみると、電流などの基本的な現象を解りやすく書いていて、簡単に理解できた。この本によると、この世の中で起こる現象はある程度他の現象で例えることができ、それは現象を理解するのに有効な方法だということだ。例えば電流という現象を水の流りに例えて考えれば理解しやすい。しかし電流と電流の間には力が働くという現象は他の現象で例えるのは難しい。ならばどの様に理解したら良いのだろうか。その答えを「電流とはなにか」という本は次の様に書いていた。「世の中には万有引力や質量保存の法則といった何故そのような現象が起きているのかは説明できないが、認めざるを得ない現象がある。このような根源的な現象を認めることによって、星の動きといった発展した現象を説明することができる。」つまり、このことを電気現象に置き換えると、電気現象での根源的な現象は、電荷と電荷の間には力が働くという現象である。これを認めることによって、先に述べた電流と電流の間には力が働くという現象を、数式を用いて導くことができるということだ。これは実際に証明でき

るので正しいといえる。まとめるとある現象を理解するには根源的な現象を理解すれば良い事が解りとても勉強になった。

最後に「科学の終焉」という少し厚めの本を読んだ。この本は著者が何人かの科学者の所を訪ねて、「科学に終わりはくるのか」という質問をぶつけて返ってきた返事を書いたものだった。この本で一番印象に残ったのは、返ってきた科学者たちの答えというのは、今までのニュートンやアインシュタインといった、偉大な人達の言葉を表現を変えているだけで、彼らを超えた答にはなっていないということだ。この本を読み始める前は、ニュートンなど偉人の発見を超える発見はいつか必ずあると思っていたが、読み終えたときそれは難しいことだと解りとてもショックを受けた。自分もいつか偉大な人達がした様な発見ができると思っていたのに、それが真っ暗になったように思えた。しかし僕が思うに、偉大な発見はできなくても、偉大な発見をうまく利用して便利なモノなら発明することはできると思う。コンピュータや携帯電話などの性能もどんどん良くなっているし、そういった発明ができれば良いと思った。この本はしきりに科学の終わりが見えているというが、僕はそうは思わない。なぜなら、僕たち生物は地球に生まれた時から今まで常に進化しているからだ。生物が進化し続ける限り科学も進歩すると思う。

これらの四冊の本を読んで、今までにないくらい新しい発見がありとても勉強になった。これから、学校や色々な所でこの夏勉強になったことを生かしていきたいと思った。

ジョン・ホーガン 科学の終焉 478  
室岡義広 電気とはなにか 238  
後藤尚久 電流とはなにか 218  
都筑卓司 場とはなにか 223  
計1,157ページ

(あいが ゆうたろう)

## 戦後文学・椎名麟三を読む

2年C組 増田 佑衣

私は戦争というものを体感したことがない世代の人間である。だからこそ戦後文学を読み、そこにあるものを少しでも理解したいと考えた。その時点での戦後文学に関する知識は皆無である。

そこで、まずは「戦後文学」というものの大筋を知ろうと思い、解説のような本を少し借りてみた。国語辞典を片手に、マルクス主義・観念的人間把握などといった難しい言葉の混ざった文章を必死で読んだ。けれども私がそれを正確に理解することはできなかつた。私には少し難しすぎたのだ。

そこで私は「戦後文学を理解しよう」という姿勢を変え、普通に現代の作家を読むのと同じように戦後文学を楽しむもうと思った。

「美しい女」「自由の彼方で」などといった椎名麟三の作品を読んだ。感じたことは非常にたくさんあったけれど、それを感想として文章にするとなると少しばかり苦勞する。引用の力を借りつつ少しずつ書いてみたいと思う。

とても印象的だったのが、「深夜の酒宴」に登場する「戸田」という人物である。彼は主人公…須巻と同じア

パートの住人で、須巻は戸田について「戸田は全く自分を生きて行く価値のある人間だとは少しも思っていないようだった。」と語っている。そんな戸田がある日、須巻に向かってこんなことを言うのだ。「僕は、先刻、桶屋になろうと思っていたのです。(中略)自分で磨いたいろんな刃物を自分の後にならべながら店の隅でとんとんたがをはめている自分の姿を想像すると、涙さえでてくるんですよ。」

須巻はこれを受けて、「戸田の告白を聞いているうちにひどく大儀になっていた。」と言っている。けれど私は、その戸田の告白をととても悲しい気持ちで読んだ。戸田という人間の生々しすぎる臆病さ、叶わなかつた夢の話、何もかもがとても絶望的に悲しい。

そして私は、同作品の中にある「あの、みつ豆でも食べませんか？」という言葉がとても好きだ。あらゆる場面で悲劇的に、ときには「死ぬのが本当なのだ」などという辛辣な言葉を併せて進んでゆくこの話の中で、この「みつ豆でも食べませんか？」というせりふだけが、妙に幸福なのである。

伊藤成彦 戦後文学を読む 310  
椎名麟三 作家の自伝58椎名麟三 287  
外2冊 計1,431ページ

(ますだ ゆい)

## 読書感想文 ☆佳作作品☆

## 違いと見えないもの

3年C組 山口 詩織

私はとても不思議な初恋の小説を読みました。これはただの恋愛小説ではありませんでした。初恋の話の中で、14歳の女の子の生き方だったり、彼との年の差から「子供」と「大人」の違いだったり様々なことを考えさせられるものでした。

私がこの話を読んで強く思い考えたことは、「子供」と「大人」の違い、あるいはその境界は何なのか。そういったものはあるのか、ということです。この話の主人公は14歳で私は17歳です。私は14歳と聞けば子供だと思います。しかもこの話の中でこの女の子の気持ちや考え方がすごく分かることも沢山ありました。だから私はまだまだ子供なのかもしれないと思いました。しかし、この女の子の彼は、20代後半で世間からしたら「大人」になるのに気持ちの持ち方や思っていることが子供のようでした。年齢の差では「大人」と「子供」として隔てられても内にあるものが「子供」としてあるなら事実上その人は「子供」になるのではないのでしょうか。そう考えると内にあるものによるから基準も境界もないのだと思いました。

私は大学生も自分で何でもできる「大人」という様に見ていますが、自分もあと数ヶ月で大学生と同じ年になります。しかしこの数ヶ月で私が思っているような「大人」に変われるとは思えません。もし来年になって今の私と同じような人が私を見たら、「大人」としてその人の目に映るのでしょうか。

14歳というのはとても微妙な年頃だと思います。小学生から中学生になって「子供」から「大人」へ成長を始める頃だからです。「子供」として持っていた内のものを「大人」としてのものへ変化させていくところだから気持ちがとても不安定になっているのだと思います。だから親という「大人」に反発したりしてしまうのではないのでしょうか。私も中学生の頃は親の言うことが分からないことが沢山ありました。「子供」は親つまり「大人」の言うことを聞くけれど、「子供」から「大人」になって自分の考えを持つようになり、自分の考えを「大人」に認めてもらいたいから反発したりするのではないのでしょうか。でも完全に「大人」になりきれものでもなく、「子供」の部分も残ってしまうから、それを隠すため、自分がそういった部分を認めたくないことによって「大人」に対して何らかの意地を張ることがあるのだと思います。

この主人公の女の子は最後に自分が無意識に張っていた意地を自分で認め、自分が「子供」であることを見出すけれど、これはそう容易なことじゃないと思います。「大人」として認めてもらいたかったのに、まだそれは時期でなくて「子供」の部分として必要なのだと悟るのは余程の考える力があることだからです。

この話は本当に様々なことを考えさせてくれました。今まで考えたことのない芸術家についてです。ここ

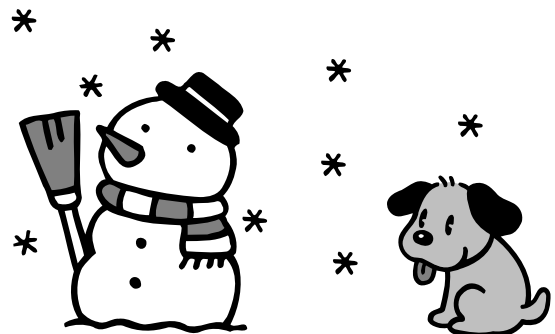
に出てくる彼は芸術家でこの作者も絵を描いたりしているところから、この本の挿絵はこの話と一緒に私に不思議な感じを与えました。私にはその挿絵に出てくる生き物が本当にいるように思えました。

今まで芸術なんて全く理解できなかつたし、どう理解し、どう読み取るのかも分かりませんでした。そもそも芸術家たちが自ら造り出すものが現実に見えるのかすごく疑問でした。しかし、この話を読んでいくと芸術家という人たちは私たちと同じ世界にいるけれど、私たちが見ようとして見えていないものを見ていて、見えない私たちに伝えてくれているのではと思いました。それが私たちにとって大切なことになりえるかもしれません。街中にあるようなオブジェだとか彫刻とか私には理解できないし見えないけれど、もしかしたら今、私の隣にあるかもしれない。私もそれを見たいという強い気持ちと感性があれば見えてくるものがあるのかもしれません。私たちが見ようと思えば見えてくるものはこの世界に沢山あるのだと思います。見えないのは自分が必要としていないから見える人たちには生きていく上で何らかの必要性があるのだと思います。

この話では二人が不思議なものを同時に見たのがきっかけで付き合うようになったことから、普段見えないものが見えるということには見た本人に何か関係してくるものがあるでしょう。もし、私が、幻を見たということがあれば驚くよりも嬉しいと感じると思います。

今もこの感想文を書いている私の隣に何かいて感想文を読みながら笑っているかもしれません。そう考えると本当に見えてくるようで、この現実にあるもの全てを見てみたいという気持ちになります。一度でいいから芸術家の眼でこの世界を見てみたいです。きっとそれぞれに伝えたいことがあるのだと思います。それが私にもあってほしいと思います。

「High and dry (はつ恋)」よしもとばなな  
(やまぐち しおり)



## 【選 評】

1000頁読破記を  
読んで

一般教育科 国語 坂本 具償



前号で、この「読破記」案内文を書いた。1000頁というのは、文庫本で約4cmの世界である、と。応募してくれた多くの人が、優に「4cm」を超えている。今年度の読破記の応募総数は226編。入選作について簡単にコメントしておきたい。

斉藤秀樹君が選んだ本は、司馬遼太郎の「坂の上の雲」。3000頁を超える大作で、登場人物が300人を超えるという。細かな歴史資料に裏付けられているであろうその記述は、読み手を迫力のある歴史舞台へと誘ってくれることであろう。「はっきり言って感想が書けない。書けばとりとめがない。」という斉藤君の言葉は、その証であろう。真に感動したとき、言葉など出ないものである。それを言葉にするには時間が必要だ。感じたこと思ったことを熟成させてください。

相賀裕太郎君は、物理科学に関する本4冊を選んだ。きっかけは、専門科目が、授業だけでは理解できない状況になってきたという必要に迫られてのことのようだが、最後には「今までにないくらい新しい発見があり、とても勉強になった。」と言う。特に「科

学には終わりが見えている」というその本の論調に反発して「生物が進化し続ける限り科学も進歩すると思う。」というところに、相賀君の技術者魂を見る思いがする。

大角卓也君の「太平洋戦争の研究」は、実に評論文形式になっていて、読み応えのある力作だ。400字詰め原稿用紙に換算してざっと35枚程度。もう少しうまくまとめればもっと引き締まる部分もなきにしもあらずだが、その分、大角君の思いがストレートにかつ存分に読み取れる。「太平洋戦争」について本当に知っているのかと詰め寄られると、「教科書」で学んだ知識くらいしか思いつかない。持っている知識と本の中に描かれている内容との相違に愕然としつつも、それが大角君の読書のエネルギーとなったようだ。「戦争」における真実とは何か。深く重いテーマだ。

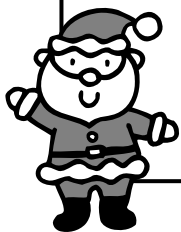
増田佑衣さんの「戦後文学・椎名麟三を読む」は、「戦後文学とは何か」から出発しながら、それが難解であるために、「戦後文学を楽しもう」というスタンスに変えて椎名麟三を読んでみたというもの。それでよいと思う。それぞれの作品を増田さんは、直観的にはあるけれど、よくつかまえているという感じがする。思わず自分も読んでみようかという気になる。できれば何か作品を絞って、深くテーマを追求する形で読書感想文へと発展していってほしいと思う。十分にその力を持っている。

(さかもと ともつぐ)

## 冬期休業中の長期貸出について

冬季休業中は下記の通り、貸出冊数と貸出期間を大幅に増やしています。自宅でのんびりと本を読みませんか。読書好きの学生が多くなることを期待しています。

貸出期間：12月20日(月)～  
返却期限：1月11日(月)  
貸出冊数：20冊まで貸出OK



## 年末年始の開館時間等について

年末年始の開館時間等は、下記のとおりです。どうぞよろしくお願いいたします。

12月25日～12月26日	終日閉館
12月27日～12月28日	9:00～17:00
12月29日～1月4日	終日閉館
1月5日～1月7日	9:00～17:00
1月8日～1月10日	終日閉館
1月11日～	平常通り 9:00～20:00



## 図 書 委 員 会 か ら

## 古本市の報告

3年S組 徳田 大輔

今年も自分達図書委員は皆楽祭で例年通り古本市を開催しました。

この古本市には先生方や学生が家で読んでいた本で、読みあきてしまった本(まんが、小説、文庫本など)やCDなどを出しています。古本市で得られた売上金は主によりよい図書館にするために使われます。去年は図書館にやわらかいソファを購入しようという

意見が出ましたが、売上金が5,720円しかなかったため断念しました。しかし今年の皆楽祭では5,846円の収入があり、計11,566円の予算があります。よって今年は更に要望にこたえる幅が増えたので、図書館に入れてほしいものがあれば検討するのでクラスの図書委員に言ってください。

今後も図書委員一同、より良い図書館を目指してがんばっていきますので、本を好きな方はもちろん興味がない方も図書館を利用してください。

(とくだ だいすけ)

## 「長く付き合える本」



電気情報工学科教員 本田 道隆

私が高松高専に来て半年と少し経った。なるべく短い時間でこれまでの仕事のスタイルを一新すべく自己改革に取り組んでいるが、これまで接していた20数年の組織文化のうち特に悪癖ともいえるものを洗い流すべく、今なお多大な努力が必要な状況にある。この悪癖の代表的なものは接する本に偏りが激しかったことである。私の場合は、医用工学や計算機ハード・ソフトの関係を本棚に並べていたが、都度買い換えていたのはこの分野だけであり、それ以外の一般的な理工書については学生時代に勉強した教科書をしつこく使っていた。そういうわけで、一般的な理工系の最近の本を多く手にするようになったのは、今年の4月以降突に久しぶりであった。

最近の教科書を手にしたとき、軽く薄くなったものと感じた。私の持っている学生時代の教科書は、ほぼ例外なくハードカバーでページ数も200ページを越すものが多かったが、書店で見かける多くの本は軽くて薄い。また、参考書などを一目見た内容は、イラストや図表が多いものが増え、よくわかるシリーズなど、本のタイトルも興味を惹くようなものが多い。昔の参考書に慣れた人間にとってみれば、一

瞬内容の軽さが気になるが、中を見ると大事なポイントはきちんととらえており、かなり読みやすい。記述内容は比較的口語に近いような平易な言葉で書かれており、しかもちょっとした挿絵やイラストが漫画風であることから、読むときにリラックスした軽い気分させることも大きな特徴のようである。

このように時代とともに理工書が分かりやすくなっていくことには大賛成であり、今後はこれまでの悪癖を正してこのような本にも多く接し、いい点を学ばなければと強く思うようになった。ただし、その一方でこのような少し軽めの本は自分の財産として長く持つことができるのであろうか、と少し気になる。学生時代に自分が使った本は、どこに何が書いてあるかが分かるし愛着もある。また、以前全く理解できなかった記述が数年経って分かるという喜びを与えてくれるときがあり、このようなときに知識が本当に自分のものになったという実感も湧く。それゆえに、理工系の道に進むなら学生時代の本は結構役立つものだが、長く使い続けるにはそれに耐えるものが本に備わっていて欲しい気がする。

やはり、いろいろなタイプの本に接することが必要だ。特に、学生時代は自分に合った本を探すことそのものが勉強のひとつであろう。分かりやすい本での学習と同時に、将来まで長く付き合えるような本との巡り合いも是非大切にして欲しい。

(ほんだ みちたか)

## 巧みな提案ができる人になりたい



建設環境工学科教員 多川 正

高松高専を卒業して10年ぶりに教員の形として戻ってくることができた最中、「時代の流れかな～」と感じる事項が2つありました。一つ目は、学校長へ直接自分の提案を伝える「目安箱」の設置、そして二つ目は「学生による授業評価」です。いずれも自由記載が可能ですが、どのような意見を記載していますか？授業評価では、レポートが多い、授業が面白くない、眠い(苦笑)などの授業の問題点を記載した学生もおられるかと思えます。

このような発言には、現状の授業方法に対する文句が潜んでおりますが、実は文句や愚痴というのは、問題がわからなければ気づかない、逆に言えば、文句があるということは問題点に気づいている証拠であり、解決方法をひねり出すのはもう一步の段階までできているのです。もう一步進んで、「こうしたらどうだろうか？」という提案があれば、問題の解決に向かって事態は動きはじめます。紹介書籍中の言葉、「同じ不満を言うなら、Glorious Discontent(著者訳“栄光ある不満”)である」は、これからの皆さんの学生生活においてきっと役に立つと思えます。

将来、皆さんは就職して仕事をしますが、それは毎日問題解決の繰り返しの日々です。学校のテストのように問題が用意され、同じ問題が何回も繰り返し出題されることはありません。実際は毎回、例外問題ばかりが出題され、記憶力の良さだけでは勝負はできません。しかも、大部分は問題が何か？を探し出すところから検討を行うものがほとんどです。

私がこの本と出会ったのは、環境浄化設備の計画の仕事を行っていた去年、東京で自社設備のプレゼン(提案)を行う出張日の朝、時間調整の為に立ち寄った新大阪駅の本屋でした。当時の仕事は、お客様の要望(例えば、安価で確実に浄化できる・・・など)に応じた浄化設備を、計画基準のないものは自分で試験確認しながら手探りで計画し、お客様にプレゼンを行い、購入していただくというもので、この本は東京までの新幹線の中で一気に読破しました。

前述のような問題を解決する方策、自分の作品などをいかに提案するか、などの具体的な技術をこの本から得ることができます。

追記：自分達が苦勞して計画した世界に2つとない作品(設備)を購入して頂き、無事に稼働の日を迎えた時の喜びは、技術者冥利につきますよ。

中島孝志 巧みな提案ができる人でできない人

(たがわ ただし)

『博士の愛した数式』

小川洋子著 (新潮社)

17年前の交通事故以来、80分で記憶が消えてしまう博士の物語。数字から縁遠くなった私も「数」に魅せられていく。「220」と「284」の関係は？阪神ファンに捧げるが、人間の生きる意味についても考えさせる。

一般教育科教員 長谷川 隆

『マナーアンドエチケット』

就職試験情報研究会著 (一ツ橋書店)

この本は就職活動をひかえた高学年生にとって必需品であると思う。面接の礼儀や服装から心得まで詳細に書いている。

本の中に紹介されている社会のマナー度チェックは自分を見直すきっかけになるかもしれないので、ぜひ読んでほしいと思う。

5年C組 箕野 健一郎

『海のふた』

よしもとばなな著 (株)ロッキング・オン)

故郷の海辺でかき氷屋をはじめた女の子の夏の物語。自然への思い。自分らしい生き方。静かな海を見ているように淡々とすすむ話の中で、何が大切なのかを気づかせてくれる作品です。沖縄出身の版画家・名嘉睦稔さんの挿画も魅力的で、心が癒されます。

機械工学科教員 小島 隆史

『迷路館の殺人』

綾辻行人著 (講談社文庫)

最新巻「暗黒館の殺人」も記憶に新しい綾辻行人の館シリーズの3作目です。悲劇の舞台はその名の通り廊下が迷路になっています。そこでくり広げられる恐怖とスリル、そして大どんでん返しに拍手！ところで、綾辻さんの奥さんが「十二国記」でおなじみの小野不由美さんってこと知ってました？

5年S組 柴田 文明

『Otama Life おたまライフ』

高宮孝治著 (角川書店)

高専の男子学生の中で、いったいどれくらいの人々が編み物経験者なんでしょうか？世の中をみてもあまりいないのではないかと思います。もったいない！あんなに楽しいのに！という訳でまずはあたまを作ってみて下さい。きっと癒されます。そしてこの本をかいた人は男性の方なんです☆

4年E組 山本 聡美

『錦帯橋架け替え全記録』

井上和博著 (株式会社アップフロントブックス)

本書は日本三名橋のひとつ、岩国市の錦帯橋五連のアーチ構造を有する世界的にも他に例を見ない文化遺産である老朽化した橋を、架け替え工事するため江戸の匠の魂を現代に蘇らせた男たちの挑戦の写真記録である。そして、三百年にわたり伝統を受け継ぎ守り続けてきた人びとのドラマ。

建築環境工学科教員 松原 三郎

『いま、会いにゆきます』

市川拓司著 (小学館)

最近映画化されて有名な、この一冊…。この本は、感動します！

少しおかしな病気を持つ主人公と、死んだ妻との不思議なできごとのお話です。愛する妻との再会の喜び、記憶のない妻への悲しさ、運命の恋の素晴らしさ。そして家族の二度目の別れ…。私は読みながら泣いていました。

4年C組 立石 裕美

『孤独か、それに等しいもの』

大崎善生著 (角川書店)

「今日一日をかけて私は何を失ってゆくのだろうか」語り手となる主人公達はそんな思いを抱えながらどん底に落ちています。本書はそんな状態から回復への軌跡を描いた作品集です。正直言って元気の無いときに読んでしまうと引きずられそうでやばいです。

機械工学科教員 吉永 慎一

『石頭コンピューター』

安野光雄著 野崎昭弘監修 (日本評論社)

コンピューターの計算の原理やプログラムの原理について、さらには「情報」に対する人間の「読解力」について、画家である著者が控え目でユーモアな高度な絵を添えながら示してくれる本、それが「石頭コンピューター」である。専門書を読むのが疲れた人、是非一読あれ。

電気情報工学科教員 漆原 史朗

『心はあるのか\_シリーズ・人間学(1)』

橋爪大三郎著 (ちくま新書)

この本のタイトルを見て、「心」はあるに決まっているじゃない、と大抵の人は思いますよね。でも、犬とか鉛筆とかは見たことがあるけど、「心」を手にとったことのある人はいないでしょ？じゃあ、「心」がある、というのはどういう意味で「ある」んだろう、と考えはじめると、実はとても深い問題に行きつくんだよ、という本です。明快かつ緻密。

一般教育科教員 高橋 宏明

『目撃証言』

E・ロフタス K・ケッチャム著 (岩波書店)

裁判を行う時に最も重要視される証拠の1つに目撃証言がある。時にはその証言1つで容疑者が死刑となる場合もある。しかし目撃者の証言というものが100%信頼できるものなのだろうか。

記憶研究の第1人者である著者が記憶の不確かさという点から証言の危うさを提示した本である。

4年M組 山下 徹

『20世紀とは何だったのか:「西欧近代」の帰結』

佐伯啓思著 (PHP新書)

本書は京都大学で行われた講義をもとに書かれた現代文明論である。平易な日本語でありながら、内容は哲学から経済学まで幅広く奥深い。ニヒリズムをいかに克服するかが現代人にとって最大の課題であると著者は言う。しかし私にとってそれ以上に重要に思えたのは、「大衆の反逆」の真の意味だ。我々を成熟した市民へと導いてくれる一冊である。

一般教育科教員 寺西 雅之



か

ら

図書館に新しく入れた本



新  
着  
図  
書  
か  
ら

『指先の花』

益子昌一著 (小学館文庫)

この本は、世界の中心で愛を叫ぶという映画の中で重要な脇役になっている「律子」が主役となって書かれた物語です。原作には存在しなかった「律子」の思いが痛いほど伝わってきます。原作を読んでも読まなくても楽しめると思います。ぜひ読んでみてください。

2年E組 藤沢 祐輔

『あなたは土木に何を求めますか』

社土木学会平成13年度全国大会実行委員会著 (技報堂出版株式会社)

本書は土木学会の討論会において、市民生活や産業基盤を守り、国土を支える土木としていかに新しい世紀の再構築のため、市民と土木技術者との間での共通認識が持てるように企画している。市民が土木に対していかなる思いで批判、苦情、疑問を持つ生の声を整理し収録したものである。

建築環境工学科教員 松原 三郎

『平成鍋物大全』

全日本鍋物研究会編集 (日本経済新聞社)

鍋物の季節がやってきました。毎度飲み会の幹事をやっているとこの時期が一番ワクワクします。本書は、全日本鍋物研究会という組織(怪しい!)が日本中の鍋という鍋を食べ尽くして編集された一冊です。これを読めば、今夜も鍋物が恋しくなるのは間違いなし。

制御情報工学科教員 由良 諭

『こうちゃん KO-CIAN』

須賀敦子文 酒井駒子画 (河出書房新社)

今回紹介する本は、紅茶ではありません。こうちゃんです。絵本ですが決して子供向けではありません。こうちゃんは、どこからともなく現れ、人々の心を癒していきます。この本を読んでみてください。多くの答えがそこに存在します。そして、夜を徹してみんなで討論してみてください。

匿名希望

『封神演義』

許仲琳著 (光荣)

中国という国は長い歴史と共に様々な物語や伝説を語り続けてきました。「三国志」や「項羽と劉邦」はその代表です。「封神演義」もその一つで、暴君紂王を倒すべく、仙人子牙が仲間と共に、ユニークで独創的な沢山の宝具という武器で戦うものです。是非一度読んでみてください。

2年S組 管納 史也

『クルマはかくして作られる』『超クルマはかくして作られる』

福野礼一郎著 (二玄社)

日本経済を支える自動車産業、そこに多様なモノづくりの世界がある。革・木・布・ガラス・塗料…といった素材から、ボディ・ブレーキ・トランスミッション・エンジン…まで、入念な取材と膨大な写真をもとに構成され、モノづくりとは何かを知るこの本です。

制御情報工学科教員 平岡 延章

『電車男』

中野独人著 (新潮社)

この本は、とかく色々な批判の多い電子掲示板が良い方向に力を発揮すると、こんなにロマンチックなことができるということを教えてくれました。気が弱く、内気な、オタク青年が掲示板のアドバイスを受けながら、恋を成就する現代的な純愛物語です。文体が掲示板形式なので最初は読みにくいですが、最後まで読みましょう。

制御情報工学科教員 由良 諭

\* 図書館に新しく入れた本



新着CD紹介

曲名	歌手又は演奏者
君繁ファイブエム	アジアティック・カンフー・ジェネレーション
LION	奥田民生
EGO-WRAPPIN	メリーメリー
CHASM	坂本龍一
ジョアン・ジルベルト・イン・トーキョー	ジョアン・ジルベルト
ロックン・ロール	ジョン・レノン
ビューティフラー・ヒューマン	ジル・スコット
レネゲイズ	レイジ・アゲインスト・ザ・マシーン
危機	イエス
ブルー・ワイルド・エンジェル	ジミ・ヘンドリックス
エルヴィス・アット・サン	エルヴィス・プレスリー
アット・フィルハーモニック・ホール	ボブ・ディラン
シェーンベルク グレの歌	ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
ワーグナー楽劇<ラインの黄金>全曲	バイロイト祝祭管弦楽団
ワーグナー楽劇<フルキュレ>全曲	バイロイト祝祭管弦楽団
ワーグナー楽劇<神々の黄昏>全曲	バイロイト祝祭管弦楽団
ワーグナー楽劇<ジークフリート>全曲	バイロイト祝祭管弦楽団
グランド・リサイタル	中村紘子
feel-best-	CM曲、TV主題歌、映画挿入曲等

新着DVD紹介

タイトル
8マイル
ライフ・オブ・デビッド・ゲイル
24 -TWENTY FOUR-
アントワン・フィッシャー
マトリックス
マトリックス リローデッド
マトリックス レボリューション
ラストサムライ
デイ・アフター・トゥモロー
キルビルNo.1 & No.2
ミスティック・リパー
ショーシャンクの空に
ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還
トイ

## 全国図書館大会香川大会で高専分散会を開催

図書館長 長谷川 隆

10月27日（水）から29日（金）までの3日間、平成16年度第90回全国図書館大会香川大会が高松市で開かれました。全国図書館大会は明治39年に第1回が開かれ、今年度は第90回になりますが、香川県で開催されたのは初めてです。1日目は県民ホールで「恐るべきさぬきうどん」の著者田尾和俊さんの記念講演「讃岐うどんブームの仕掛けとメディアの役割」がありました。2日目には各会場に分かれて13の分科会が開かれ、3日目にはシンポジウムが行われました。

2日目の第4分科会（短大・高専図書館）のテーマは、第3分科会（大学図書館）と共通で、「図書館の経営戦略～図書館は利用者に何が出来るか～」でした。午前中の基調講演の後、午後は、詫間電波高専と高松高専が世話校になって、高専だけの分散会が開かれました。会場は、瀬戸内海が一望できるサンポート高松かがわ国際会議場で、全国各地の高専から70名を超える参加者がありました。平成16年4月より国立55高専が一つの独立行政法人国立高等専門学校機構になったことをふまえて、法人化後の高専図書館のあり方について、活発な議論がなされました。

早野浩本校校長の開会の挨拶の後、3名の発表がありました。木下伸二三重大学図書・情報部長からは、法人化後の図書館戦略として、コストパフォーマンスの高い電子ジャーナルの積極的導入活用や地域との連携強化の必要性が力説されました。畑村学宇部高専図書館長補からは、学生図書委員の活動を活発にすることによって情報発信の場としての図書館の活性化を図ることができるとの発表がありました。

宇部高専では図書館だよりを学生図書委員が中心になって編集しているそうです。布川みつ子東京高専図書係長からは、法人化後の東京高専の現状と課題について丁寧な発表がありました。

図書館とは何か、ということを変更して問い直し、法人化後の財政的に厳しい状況の中で、何をしなければならないか、何が出来るのかを考えさせられる分散会だったと思います。

最後に、竹内賢一詫間電波高専校長の閉会の挨拶があり、意義ある高専分散会を終えることができました。

なお、西口郁三長岡技術科学大学附属図書館長からの発表も予定されていましたが、直前に起こった新潟県中越地震のため図書館建物に大きな被害があり、香川に来ていただくことができなくなったことを付け加えておきます。

（はせがわ たかし）



### 平成15年度分類別図書購入調

分類	冊数		金額	
	洋書	和書	洋書	和書
0 (総記)	0	111	0	444,077
内人文・情報科学	0	89	0	263,260
1 (哲学)	0	42	0	75,456
2 (歴史)	1	49	2,373	245,140
3 (社会科学)	3	125	28,632	292,137
4 (自然科学)	55	257	625,134	903,811
5 (技術・工学)	0	335	0	1,200,075
6 (産業)	0	12	0	38,519
7 (芸術)	0	149	0	192,826
8 (言語)	15	47	31,759	117,444
9 (文学)	5	289	6,951	289,134
計	79	1,416	694,849	3,798,619

図書館では平成15年度に1,495冊の図書を購入しました。平成16年11月4日現在の図書総数は83,532冊あり、内、閲覧室には37,959冊配架しています。ベストセラー・話題の本等取りそろえてあり、図書以外にも雑誌・CD・DVDもありますので是非お立ち寄りください。

### 編集後記

10月末に全国図書館大会が高松市で開かれ、高専分散会も開かれました。当日（28日）は秋晴れて、会場である高松シンボルタワー6、7階のかがわ国際会議場前面の大きな窓から、秋の瀬戸内海が広がっていました。この景色を見るだけでも全国各地から来ていただいた価値があると密かに思ったものです。今回の図書館だよりは発行が2週間ほど遅くなりましたが、この図書館大会のためですと言いつけておきます。

（図書館長）

